

〔瑤囊抄〕將基ノ馬ニ玉ヲ王ト云ハ何ノ故ゾ

兩王イマサン事ヲ忌テ必ズ一方ヲ玉ト書ク是手跡家口傳ト云々

〔御湯殿の上の日記〕文祿四年五月五日太かうよりきくいていぐわんしゆ寺中山御つかいにて、まやうぎのむまわうしやうをあらためて、大將になをされ候へのよし申さる、御心へあり

〔半日閑話〕一六誹園六路が隨筆寐覺硯の中に

王將に點をうつ事王二人なし故に一ツの王には點を打ところ、飛車は大將、角行は副將、金將は極官にしてなりなし故になり馬はみな金になる也、總數三十六禽の表也、又手直りこまは、王二枚に點打て有、

〔萩原隨筆〕象棋 駒銘水無瀬ヲ家トス、王ノ字ニ點ウツコトハ國ニ二君ナシノ心ト云ヘリ、又二王イマサンコトヲ忌テ一方ニ點ヲウツトモ云ヘリ、或説禁中ニテハ兩方ニ玉ヲ用、王ヲセムルト云コトヲ忌ユヘナリ云々

〔善庵隨筆〕予川朝先年大橋宗桂ノ需ニ應ジテ其著述セル將基ノ書ニ序スルコトノアリシニ、王將トイフ馬子ハ何トモ疑ハシキ名ナリ、王ナレバ王將ナレバ將トイフベシ、王ト將ト混稱スルノ理アルマジト、將基ノ諸書ヲ攷證スルニ開祖宗桂ヨリ四代目宗桂マデ代々著述スル所ノ將基圖式ニ雙方トモ玉將トアリテ、王將ノ名ナシ、因テ思フニ玉ヲ以テ大將トシ、金銀ヲ副將トスルナルベシ、左スレバ金將銀將ノ名モ據アリテ、ヒトシホ面白ク覺ユ、蓋シ五代目宗桂以後、雙方ノ同ジク紛ハシキヲ嫌ヒ、一方ハ一點ヲ省キテ、差別セシニヤアラント、今ノ宗桂ニ語リシニ、宗桂曰クソレハ必ラズ然ルベシ、其ツケハ毎年十一月十七日御吉例ニテ御城ニ於テ將基仰セ付ラレ、其圖譜ヲ上ルニ、雙方トモ玉將ト書スルコト先例ニテ、王將トハイハスコトノ由家ニ申シ傳ヘ、今ニ代々玉將ト書上レドモ、何故トイフコトヲ知ラザリシニ、コレニテ明白ナリト、遂ニ其嘗テ著述セル書ヲ將基明玉ト名ヲ易へ上梓シ、予ガ序ヲ卷首ニ載タリキ、コレ細事トイヘド